

13. 新規需要米向け超多収性水稻品種「タカナリ」の効率的施肥法

1. 背景とねらい

新規需要米の低コスト生産のためには、肥料コストを上昇させずに多収穫することが重要である。そこで、新規需要米に好適な品種として選定した超多収性水稻品種「タカナリ」について、肥料費を抑制しつつ多収を確保するための効率的な窒素施用技術を確立する。

2. 成果の内容

- 1) 粗玄米重は、2009年は穂首分化期および幼穂形成始期、減数分裂期の窒素施用によって、2010年は幼穂形成始期および減数分裂期の窒素施用によって有意に増加し、両年とも特に幼穂形成始期の窒素施用の寄与率が極めて高い(図1)。
- 2) 粗玄米重の増加に最も寄与する窒素施用時期を組み合わせた場合の収量構成要素の推定値は、 m^2 当たり全籾数が46,875~57,493粒と極めて多いにもかかわらず登熟歩合が91.3~92.7%と高いことから、粗玄米重の推定値も947~1,012kg/10aと極めて多い(図2,表1)。
- 3) 「タカナリ」の効率的多収のための窒素施用基準を図3に示す。穂首分化期(出穂期前35~40日)に2~3kg/10a、幼穂形成始期(出穂期前25~30日)に6~7kg/10a、減数分裂期(出穂期前10~15日)に2~3kg/10aの窒素を施用することによって、籾数が確保され効率的に多収となる。

3. 利用上の留意点

- 1) 窒素施用基準は、農業技術センター圃場(東広島市、標高224m)を想定したものであり、標高や移植時期等の栽培条件に応じて組み立てる必要がある。
- 2) 本成果に基づく田植え同時一発施肥法については、現在検討中である。

(生産環境研究部)

4. 具体的データ

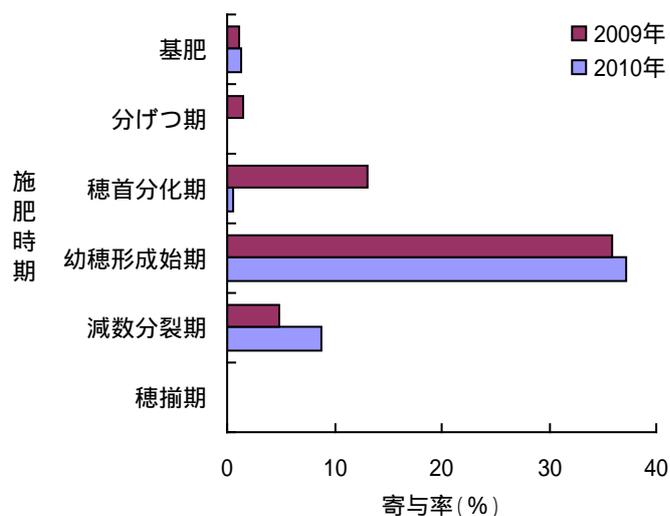


図1 施肥時期の異なる窒素施用が「タカナリ」の粗玄米収量の増加に及ぼす寄与率

図2 「タカナリ」の成熟期の状況

表1 「タカナリ」の収量に有意な正の効果を示す窒素施用時期を組み合わせた場合の収量構成要素および収量の推定値

試験年次	一穂粒数 (粒/本)	穂数 (本/m ²)	総粒数 (粒/m ²)	千粒重 (g)	登熟歩合 (%)	粗玄米重 (kg/10a)
2009年	155	303	46,773	21.7	92.7	947
2010年	204	293	57,493	19.7	91.3	1,012

注) 推定に用いた窒素施用量 (kg/10a) の組み合わせは、2009年が穂首分化期4 - 幼穂形成始期4 - 減数分裂期4、2010年が幼穂形成始期8 - 減数分裂期4である。

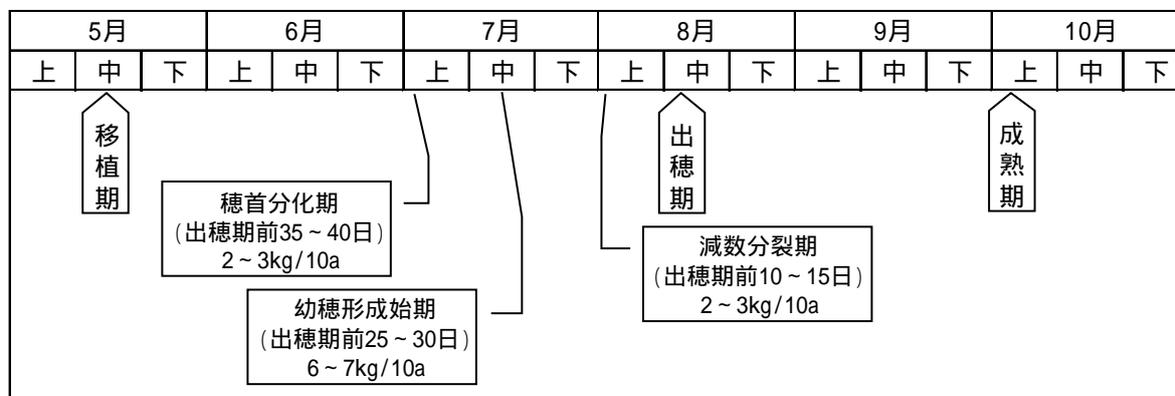


図3 「タカナリ」の効率的多収のための窒素施用基準